

博物館 Dictionary No.242

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

世界を魅了した更紗 —「シャム渡り」更紗から—

みなさんは「更紗（サラサ）」という布をご存じですか？ なんだか異国情緒ただよう響きですね。江戸時代の書物には「更紗・佐羅紗・皿紗・紗羅佐・佐良佐」と記され、音に漢字をあてた、外国から来た言葉であることがわかります。それもそのはず、更紗のルーツはインドからです。16 世紀のオランダ人、リンスホーテンは『東方案内記』という本の中で、インド南東の海岸地方（コロマンデルコースト）では「最高級の木綿布」をサラサ Sarasa と呼んでいたと記しています（更紗の語源については様々な説があります）。木綿の布は今では身近ですから、「最高級」というと少し違和感があるかもしれませんね。しかし紀元前から 12 世紀頃までの長い間、木綿は主にインドだけで生産される珍しい布でした。なぜなら、原料となる綿花がインドのような気温の高い地域で育つ植物だからです。

木綿には絹や羊毛と比べて色が定着しづらいという性質があります。しかし更紗は、別名「華布」つまり「文様のある布」と呼ばれる通り、色鮮やかに文様を染めているのが特徴です。インドでは「媒染」や「防染」などの高い技術により、洗濯してもなかなか色落ちしない文様染を古くから制作していました。木綿を染める技術が発達していなかった地域の人々にとってはまさにミラクル（奇跡的）。大航海時代に、南蛮船などに載せられて、ヨーロッパや東アジア、そして日本にもたらされた「最高の木綿布＝更紗」は、たちまちに世界の人々を魅了し、一大ブームを巻き起こしたのです。

- ※1 化学反応を起こして染料を色鮮やかに発色・定着させる技法
 ※2 布に蠟で図柄を描くことにより、その部分だけ染料が染まらないようにして文様を表現する技法

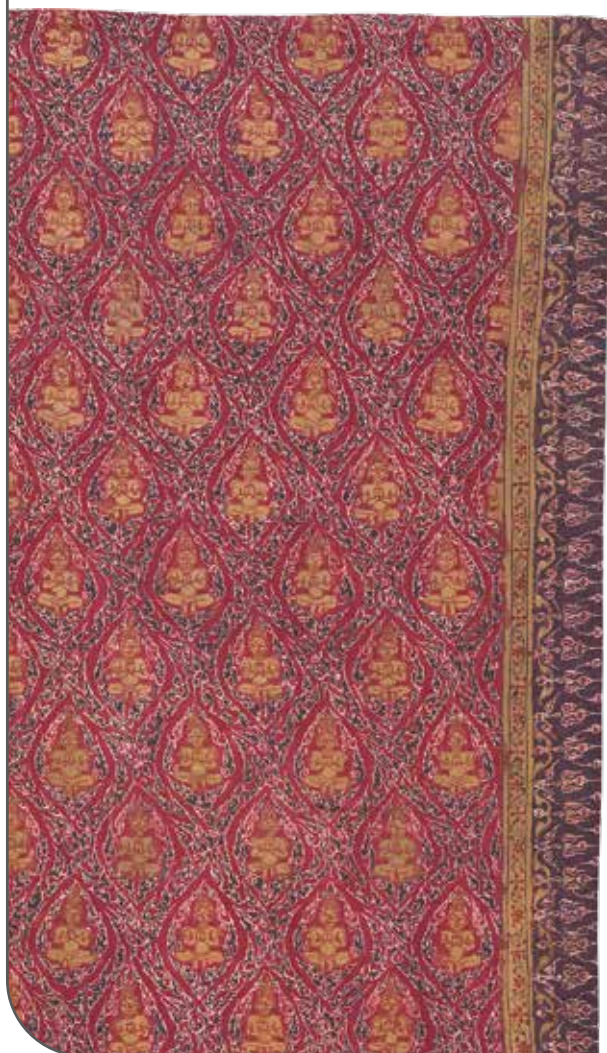


図1 赤木綿地菩薩文様更紗敷物

インド 19 世紀 京都国立博物館蔵（柴田芳明氏寄贈）

もっとも、ブームがおきた理由のひとつには、輸出先の趣味にあわせたデザインを売り込む、ヨーロッパの東インド会社の戦略もありました。なかには暹羅（現在のタイ）王国のように、自国好みの更紗を直接インドに注文する例も出てきます。その一例が赤木綿地菩薩文様更紗敷物です（図1・2）。えんじ色（暗めの赤色）の布地に、合掌する菩薩と、それを囲む炎のような飾りが連続する文様が、黄色や紫色で全体に染めあわされています。仏教国であるシャムの好みが出ていますね。菩薩の顔やお姿をよく観察してみましょう（図2）。どうもそれぞれが微妙に異なっているように見えます。つまりこれらの文様はスタンプのような型押し（捺染）ではなく、なんと全てが手描きなのです。3メートルを超える生地を表された菩薩は1000近く。たいへんな手間暇がかかったことでしょう。このような手描きの染物は王族のための高級品とされ、主に宮廷の室内を飾ったり、時に象の背飾りなどにも使われたりしたようです。そして日本に渡ると「シャム渡り」と呼ばれて人気となり、京都ではそれをまねした「紗羅染」が生まれました。江戸時代に出版され、各地の名物についても記している『毛吹草』（1645年刊）という本には、紗羅染が早くも山城（京都）の名物となっています。

このように外国からやってきた更紗は京都の染織人たちを大いに刺激し、日本が誇る高度な文様を染める技術・友禅染を生み出すきっかけとなりました。同じように、インドネシアではジャワ更紗、フランスやイギリス、ドイツ、オランダなどではヨーロッパ更紗が制作され、インド更紗のまねから、各国独自の技術とデザインを発達させました。インド更紗は世界の文様染の出発点ともいえるのです。



図2 赤木綿地菩薩文様更紗敷物 インド 19世紀 京都国立博物館蔵（柴田芳明氏寄贈）

（工芸室 山内麻衣子）